

令和6年  
10月30日

# 病害虫発生予報 11月号

茨城県病害虫防除所

収穫終了後は被害葉等の残渣を圃場から持ち出し、  
次作の病害虫の発生源を減らしましょう。

## < 目次 >

### I. 今月の予報

#### 【注意すべき病害虫】

イチゴ：ハダニ類	1
促成ピーマン：コナジラミ類、アザミウマ類	1
秋冬ネギ：ネギハモグリバエ、ネギアザミウマ	2
○促成トマトにおいて黄化葉巻病の対策を徹底しましょう	3
○トマト黄化葉巻病・キュウリ退緑黄化病の防除対策を行いましょ	4
共通害虫：シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、ハスモンヨトウ	4

#### 【その他の病害虫】

イチゴ、促成ピーマン、促成キュウリ、秋冬ハクサイ	6
--------------------------	---

#### 【防除所レポート】

フェロモントラップへのトマトキバガの誘殺数が昨年より多く認められています	7
ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発生状況と防除対策	8
ナシ黒星病（秋型病斑）の発生が見られます 秋季防除・落葉処理を徹底しましょ	9
う！	
令和6年の果樹におけるカメムシ類の発生経過	10

### II. 今月の気象予報

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの  
「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。Tel :0299-45-8200

ホームページでは病害虫・フェロモントラップ・農薬関連情報をご覧いただけます。

<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>



※病害虫の発生状況や、適切な防除方法は地域により異なる可能性があります。病害虫の防除や農薬についてのご相談は、お住まいの都道府県にある病害虫防除所等の指導機関にお問い合わせください。

# I. 今月の予報

## 【注意すべき病害虫】

### イチゴ

#### 1. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在、寄生葉率（本年値 18.7%、平年値 5.3%）は平年より高く、発生地点率（本年値 50%、平年値 44%）は平年並～やや高い。
- ② 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

### 促成ピーマン

#### 1. コナジラミ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在、寄生葉率（本年値 11.5%、平年値 3.0%）は平年より高く、発生地点率（本年値 100%、平年値 63%）は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難となる他、果実にすす症状を生じるため発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏にもかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ 天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

(促成ピーマン 続き)

## 2. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在、寄生花率（本年値 36.0%、平年値 16.8%）は平年よりやや高い～高く、一花あたりの寄生虫数（本年値 3.8頭、平年値 0.7頭）は平年より多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速く、各種ウイルスを媒介するので発生が少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が花や果実にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ 天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

## 秋冬ネギ

### 1. ネギハモグリバエ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在、被害度\*（本年値 19.1、平年値 9.0）、発生地点率（本年値 100%、平年値 91%）ともに平年より高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

※被害度：食害の程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
- ② 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

(秋冬ネギ 続き)

## 2. ネギアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在、被害度<sup>\*</sup>(本年値29.2、平年値27.7)は平年並、芯葉の被害株率(本年値97.3%、平年値65.8%)は平年より高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

※被害度：食害の程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 雑草にも寄生するため、圃場周辺の除草を徹底する。
- ② 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
- ③ 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

### 促成トマトにおいて黄化葉巻病の対策を徹底しましょう

トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミが媒介するウイルス病です。発病してからの治療はできないため、タバココナジラミの防除が重要です。

本年は、抑制トマトにおいて黄化葉巻病が平年より多く発生しています。本病は前作の促成トマト(令和5-6年)でも多くの発生を認めました。そのため、促成トマトにおいても黄化葉巻病の対策を徹底しましょう。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病株は伝染源となるため、速やかに抜き取り、適切に処分する。
- ② 媒介虫であるタバココナジラミの施設内への侵入および施設外への飛び出しを防ぐため、開口部に0.4mm目合い以下の防虫ネットを設置する。施設ビニルや防虫ネットに破損がある場合は必ず補修する。
- ③ 黄色粘着板や黄色粘着テープを施設内や周辺部に設置し、タバココナジラミ成虫を捕殺する。
- ④ タバココナジラミは多発すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ⑤ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。タバココナジラミの薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑥ 黄化葉巻病耐病性品種は、ウイルスに感染しても発病は抑制されるが、感染株は本病の伝染源になるため、タバココナジラミの防除は感受性品種と同様に行う。
- ⑦ 雑草はタバココナジラミの生息場所となるため、ハウス内外の除草を徹底する。また、野良生えトマトは伝染源となりやすいので見つけ次第処分する。

(令和6年8月20日発表 病害虫速報 No.8 参照)

## トマト黄化葉巻病・キュウリ退緑黄化病の防除対策を行いましょ

抑制トマトでは黄化葉巻病が平年より多く、抑制キュウリでは退緑黄化病が平年よりやや多い～多く発生しています。両病害はタバココナジラミによって媒介されるウイルス病で、タバココナジラミは各病原ウイルスに感染した植物を吸汁することでウイルスを獲得し、ウイルスを伝搬します。

両病害の発生がみられた施設圃場では、病原ウイルスを保毒したタバココナジラミのハウス外への飛び出しや次作への持ち越しを防止するため、栽培後半でも、成虫に対して効果の高い薬剤を用いた防除を行い、タバココナジラミの密度を下げましょ。また、栽培終了後は、薬剤処理による古株枯死を行った上で、作物残渣を適切に処分してください。

加えて、生育初期に感染すると、品質の低下や収量の減少等の被害が特に大きくなるため、これから作付けとなる施設圃場では、タバココナジラミを入れない対策を行うとともに、初期防除を徹底ましょ。

### 共通害虫

#### 1. シロイチモジヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 直近1か月間（9月26日～10月25日）のフェロモントラップへの誘殺数は、笠間市およびつくば市で平年より多い。
- ② 10月下旬現在、イチゴ、冬レタス、秋冬ハクサイ、秋冬ネギの圃場で発生を認めている。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 中齢以降になると薬剤の防除効果が劣るので、圃場をよく観察し、集団で生息する若齢幼虫の早期発見に努め、防除を徹底する。
- ② 結球葉菜類では、幼虫が結球内に食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期前後の防除を徹底する。
- ③ 施設栽培では、出入口も含めてハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。低温期でも加害が続くので、発生しているハウスでは防除を徹底する。
- ④ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑤ 令和4年度に主要薬剤の殺虫効果について試験を行ったので参考にする。

（令和5年2月24日発表 病害虫発生予報3月号 p3-4 防除所レポート参照）

（令和6年7月31日発表 病害虫速報 No.7 参照）

(共通害虫 続き)

## 2. オオタバコガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 直近1か月間(9月21日～10月20日)のフェロモントラップへの誘殺数は、龍ヶ崎市および坂東市で平年よりやや多い～多く、土浦市で平年よりやや多く、筑西市で平年並である。
- ② 10月下旬現在、イチゴ、秋冬ハクサイの圃場で発生を認めている。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 中齢以降になると薬剤の防除効果が劣るので、圃場をよく観察し、若齢幼虫の早期発見に努め防除を徹底する。
- ② 結球葉菜類では、幼虫が結球内に食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期前後の防除を徹底する。
- ③ 施設栽培では、出入口も含めてハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。低温期でも加害が続くので、発生しているハウスでは防除を徹底する。
- ④ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑤ 病害虫防除所ホームページにフェロモントラップの誘殺状況を公開しているので参考にする。

## 3. ハスモンヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 直近1か月間(9月21日～10月20日)のフェロモントラップへの誘殺数は、筑西市で平年よりやや多い～多く、土浦市および鉾田市で平年並、龍ヶ崎市で平年よりやや少ない。
- ② 10月下旬現在、イチゴ、抑制キュウリ、秋冬ハクサイの圃場で発生を認めている。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 中齢以降になると薬剤の防除効果が劣るので、圃場をよく観察し、集団で生息する若齢幼虫の早期発見に努め防除を徹底する。
- ② 結球葉菜類では、幼虫が結球内に食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期前後の防除を徹底する。
- ③ 施設栽培では、出入口も含めてハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。低温期でも加害が続くので、発生しているハウスでは防除を徹底する。
- ④ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑤ 病害虫防除所ホームページにフェロモントラップの誘殺状況を公開しているので参考にする。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	10月下旬現在、平年並の発生である。
	アザミウマ類	発生量：やや多い	10月下旬現在、平年並～やや多い発生である。向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。
	アブラムシ類		10月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
促成ピーマン	斑点病	発生量：平年並 ～やや多い	10月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
	アブラムシ類	発生量：やや多い	10月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
	ハダニ類	発生量：平年並 ～やや多い	10月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
促成キュウリ	退緑黄化病	発生量：－	10月上旬現在、抑制キュウリで平年よりやや多い～多い発生である。促成キュウリにおいて、媒介虫であるタバココナジラミの防除対策等を徹底する。
	黄化えそ病		10月上旬現在、抑制キュウリで平年並の発生である。促成キュウリにおいて、媒介虫であるミナミキイロアザミウマの防除対策等を徹底する。
秋冬ハクサイ	軟腐病	発生量：やや多い ～多い	10月下旬現在、平年よりやや多い～多い発生である。
	黒斑病	発生量：やや多い	10月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
	黒斑細菌病		

フェロモントラップへのトマトキバガの誘殺数が昨年より多く認められています

トマト圃場等への飛び込みや発生に注意しましょう

トマトキバガは、令和3年に熊本県で初めて発生が確認された侵入害虫で、主な寄主植物であるナス科（トマト等）を食害します。茨城県では、令和4年から県内4地点にフェロモントラップを設置して調査を行ったところ、令和5年10月に県内で初めてトマトキバガ成虫の誘殺を認めました。（令和5年10月24日発表 病害虫発生予察特殊報 第1号 参照）

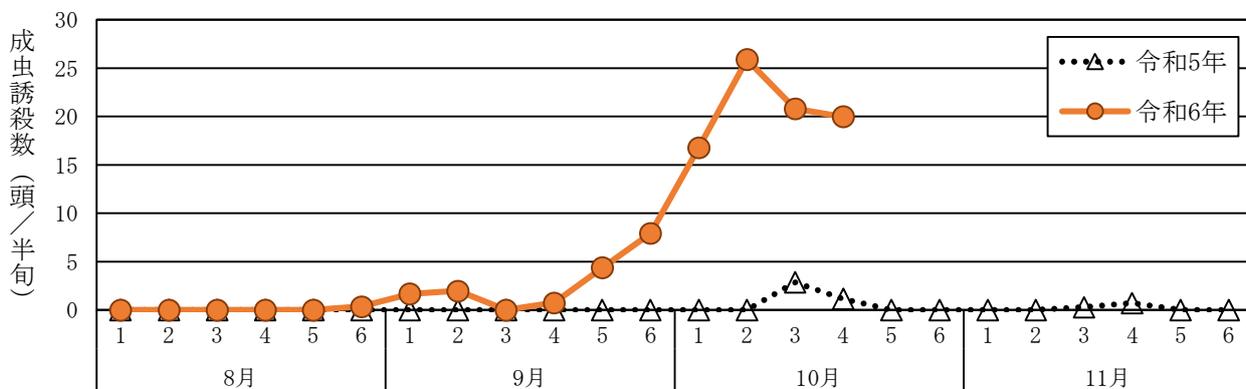
本年は、3月中旬からフェロモントラップ調査を行ったところ、成虫の誘殺は昨年よりも早い9月上旬から認められ、その後も昨年より多い誘殺を認めています（図）。

現在のところ、県内のトマトキバガによる農作物の被害は認められていませんが、他県では、冬期間でもハウス内での発生が継続的に確認されていますので、今後もハウス内への飛び込みや発生に注意しましょう。（令和6年10月18日発表 病害虫速報 No.9 参照）

トマトキバガの発生や被害が疑われた場合は、最寄りの農業改良普及センター、病害虫防除所に連絡してください。

[トマトでの被害の特徴]

- ① 茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の被害は、ハモグリバエ類の食害痕と類似するが、ハモグリバエ類は線状に痕を残すのに対し、トマトキバガは面的に食害する。トマトキバガの食害部分は表面のみを残した薄皮の袋状になり、葉の裏面からでも透けて見える（写真1）。
- ② 果実では幼虫が食入し内部を加害し、数 mm 程度の穿孔痕が生じるとともに食害部分が腐敗する（写真2）。



図：フェロモントラップへのトマトキバガ成虫の誘殺数（県内4地点合計）（月・半旬）



写真1 トマトキバガ幼虫による被害葉



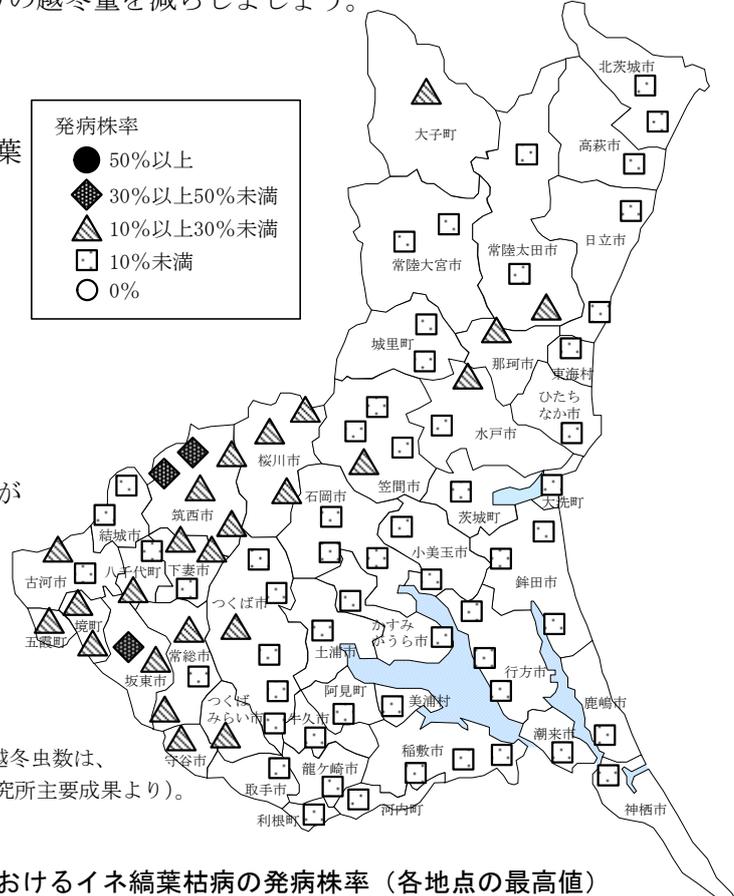
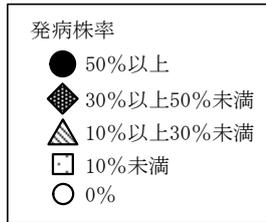
写真2 トマトキバガ幼虫によるトマト果実の食害  
（写真1、2は、農林水産省植物防疫所原図）

## ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発生状況と防除対策

県内 84 地点の水田において、ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発生状況を調査したところ、県内全市町村で発生を確認しました。翌年の縞葉枯病の発生を少なくするためには、引き続き徹底した防除対策が必要であり、速やかにひこばえをすき込むとともに、冬季の畦畔等の除草に努め、ウイルスを保有したヒメトビウンカの越冬量を減らしましょう。

### 【現在の発生状況】

- 令和 6 年 9～10 月に調査した結果、全市町村でひこばえにおけるイネ縞葉枯病の発生を確認した（図）。
- 県西地域の平均発病株率は 8.8%と県内で最も高かった（表）。
- 市町村別の最高発病株率は、0.3～33.3%であった（図、表）。



### 【防除対策】

- ひこばえは、ヒメトビウンカの増殖・越冬場所となる他、ひこばえが発病株である場合、ヒメトビウンカの保毒虫率上昇の原因となるため、収穫後は速やかに耕起する※。
  - 畦畔、土手等のイネ科雑草は、ヒメトビウンカの越冬場所となるため、除草に努める。
- ※ 畦畔のイネ科雑草におけるヒメトビウンカの越冬虫数は、水田の耕起時期が早いほど少ない（R1 農業研究所主要成果より）。

図 ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発病株率（各地点の最高値）  
注1) 調査した 5 圃場/地点のうち、最も高かった圃場のデータ 注2) 1 圃場あたり 300 株の見取り調査

表 ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の各市町村別の平均発病株率および最高発病株率

地域	市町村	発病株率 (%)		地域	市町村	発病株率 (%)		地域	市町村	発病株率 (%)	
		平均 <sup>1)</sup>	最高 <sup>2)</sup>			平均	最高			平均	最高
県北	日立市	2.2	9.3	県南	鹿嶋市	0.2	1.0	県南	守谷市	8.6	12.7
	常陸太田市	4.7	16.0		神栖市	1.3	2.7		つくばみらい市	6.1	11.3
	高萩市	2.7	4.3		鉾田市	0.7	2.0		利根町	1.9	5.3
	北茨城市	1.9	3.7		潮来市	0.3	0.7		県南平均	2.6	-
	常陸大宮市	1.7	5.7		行方市	1.8	5.0		下妻市	5.6	17.0
	大子町	6.7	15.3		鹿行平均	1.0	-		筑西市	11.6	31.0
県北平均	3.2	-				桜川市	7.1	17.3			
県中央	水戸市	7.4	12.7	県南	土浦市	2.7	6.0	県西	結城市	1.8	4.7
	ひたちなか市	2.2	3.3		石岡市	3.5	9.3		常総市	8.1	21.0
	那珂市	7.5	13.7		かすみがうら市	1.3	3.3		八千代町	6.2	13.7
	小美玉市	1.7	7.7		龍ヶ崎市	0.1	0.3		古河市	5.9	19.0
	茨城町	0.5	1.3		牛久市	3.9	5.0		坂東市	20.8	33.3
	大洗町	3.7	6.3		稲敷市	1.0	3.3		五霞町	12.8	17.0
	東海村	1.6	5.0		美浦村	0.6	1.3		境町	8.8	26.3
	笠間市	3.5	11.7		阿見町	2.6	4.0		県西平均	8.8	-
	城里町	0.6	1.7		河内町	2.5	6.7		全県平均	4.5	-
	県中央平均	3.3	-		取手市	1.9	5.0				
			つくば市	2.8	13.7						

1) 各市町村1～6地点の平均値。1地点あたり5圃場調査（300株/圃場）  
2) 市町村内で最も高かった圃場のデータ

## ナシ黒星病（秋型病斑）の発生が見られます 秋季防除・落葉処理を徹底しましょう！

### 1. 本年の発生状況

ナシ黒星病は、5月上旬から花そう基部および果実に発生が認められ、6月上旬以降、葉においても発生が認められた。その後、6～7月は葉、果実ともに平年よりやや少ない～少ない発生で推移し、8月は果実では平年よりやや少ない～少ない発生だったが、葉では平年並～やや多い発生が認められた。落葉前の10月中旬に黒星病の秋型病斑（写真）の調査を行った結果、県内全域の発病度は平年並～やや低く、発生地点率は平年並～やや高かった（表、図）。

表 ナシ黒星病秋型病斑の発病度と発生地点率

地域(地点数)	発病度 <sup>1)</sup>			発生地点率(%)		
	令和6年	平年 <sup>2)</sup>	順位 <sup>3)</sup>	令和6年	平年	順位
県北・県央(4)	0.1	1.6	10	25	54	8-11
県南(6)	0.4	1.4	7	67	56	4-5
県西(10)	0.2	0.5	6	70	54	4-5
全県(20)	0.2	0.9	8	60	55	4

1) 発病度：圃場当たり 300 葉について発病の程度をもとに算出した値。最小値は 0 で最大値は 100 となる。

2) 平年値：平成 26～令和 5 年の平均値

3) 順位：本年を含む過去 11 年間における本年値の順位（8-11 は 8 位から 11 位まで同じ数字であることを示す）

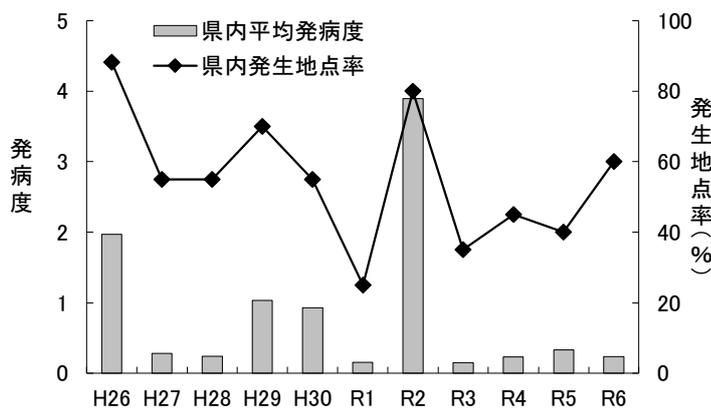


図 ナシ黒星病の秋型病斑の発生状況の年次推移



写真 ナシ黒星病の秋型病斑

### 2. 防除対策

#### ①落葉前の薬剤防除

黒星病の秋型病斑上に形成された分生子は、10～11月の降雨により、枝を流れ落ちてりん片に感染し、翌年の伝染源となる。そのため、収穫終了後から落葉前までの秋季防除を徹底する。特に、徒長枝の先端に薬液が十分かかるよう、スピードスプレーヤの散布圧を調整する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

また、農薬の使用回数は本年の収穫終了後から翌年の収穫終了までをカウントするため、注意する。

#### ②落葉処理

秋型病斑を生じた落葉上に形成された子のう胞子は、翌年の3～5月にかけて好適な温度・湿度条件になると降雨の度に飛散する。そのため、落葉は集めて適正に処理する等、落葉処理を徹底し、翌年の伝染源を減らす。この作業ができない場合、落葉をロータリで土中にすき込むことでも効果が期待できる。

## 令和6年の果樹におけるカメムシ類の発生経過

本年の果樹におけるカメムシ類の発生経過について、県内の山林（42 地点）での越冬数調査、サクラ（2 地点）での生息密度調査、予察灯調査（1 地点）およびナシ調査圃場（20 圃場）での被害果調査の結果をまとめましたので、参考にしてください。

### [カメムシ類の主な発生種]

本県において果樹を加害する主なカメムシ類はチャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ等である。いずれも成虫で越冬するが、越冬場所は種によって異なる。スギ、ヒノキの果実（球果）等を主要な餌とし、カメムシ類の発生量に対して主要な餌の量が不足すると果樹園に飛来してウメ、ナシ、カキ等の果実を吸汁加害する。

### [本年の発生状況]

#### 1. 山林でのチャバネアオカメムシの越冬数調査（2 月）

本年 2 月上旬頃に山林の表層土を含んだ落葉を 1 地点当たり 30 リットル採取し、越冬数を調査した結果、越冬成虫数（本年値 9.7 頭、平年値 1.9 頭）は平年より多く、越冬地点率（本年値 86%、平年値 40%）は平年より高かった。

#### 2. サクラでのチャバネアオカメムシの生息密度調査（4 月下旬～5 月）

餌となるサクラに移動する時期にサクラ果実（10 結果枝）の生息密度を調査した結果、生息密度（本年値 3.5 頭、平年値 4.9 頭）は過去 11 年中 3 番目に高く、平年よりやや高かった。

#### 3. 予察灯での発生量調査（4～10 月）

チャバネアオカメムシの越冬成虫は 4 月第 5 半旬から誘殺され、平年よりやや早かった。4～7 月の総誘殺数（本年値 2,401 頭、平年値 560 頭）は平年より多く、8～10 月は平年値を下回る誘殺数で推移した（図）。

ツヤアオカメムシの越冬成虫は 4 月第 5 半旬から誘殺され、平年より早かった。4～7 月の総誘殺数（本年値 711 頭、平年値 48 頭）は平年より多く、8～10 月はおおむね平年並の誘殺数で推移した（図）。

クサギカメムシの越冬成虫は 4 月第 6 半旬から誘殺され、平年より早かった。4～7 月の予察灯への総誘殺数（本年値 156 頭、平年値 54 頭）は平年よりやや多い～多く、8～10 月はおおむね平年値を下回る誘殺数で推移した（データ省略）。

#### 4. ナシ調査圃場での被害果調査（5～9 月）

5 月上旬に被害が認められ、8 月下旬における被害果率（本年値 0.5%、平年値 0.2%）は平年よりやや高い～高かった。

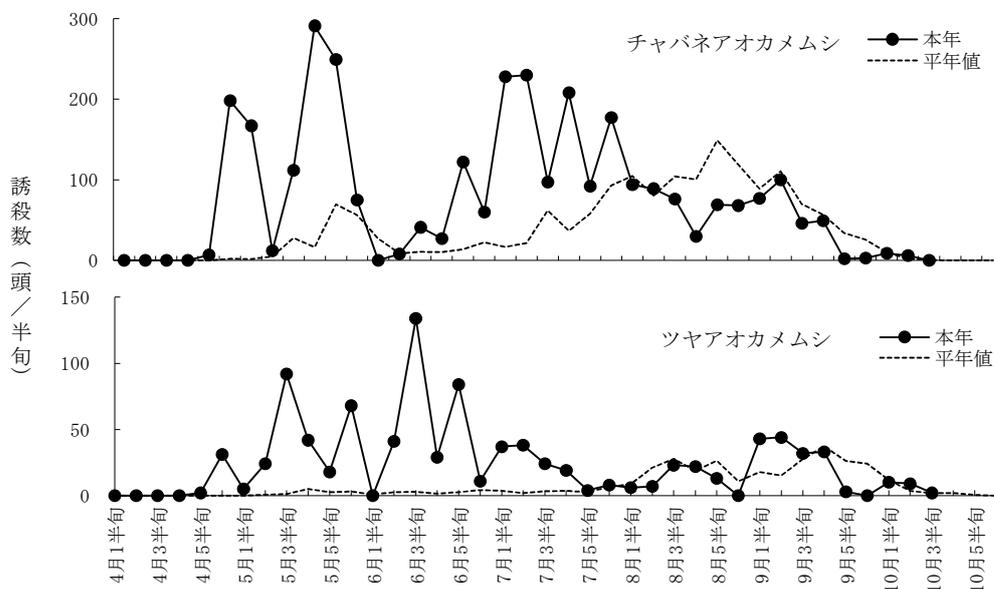


図 チャバネアオカメムシとツヤアオカメムシの予察灯（かすみがうら市）への誘殺数

## II. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 10月26日から11月25日)

気象庁 (10月24日 発表)

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]	要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
	気温	関東甲信全域	10	10	80
	降水量	関東甲信全域	10	30	60
	日照時間	関東甲信全域	50	40	10

[概要]

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう 1 か月程度は気温の高い状態が続き、期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

< 1 週目の予報 > 10月26日 (土曜日) から 11月1日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 80%

< 2 週目の予報 > 11月2日 (土曜日) から 11月8日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 70%

< 3 週目から 4 週目の予報 > 11月9日 (土曜日) から 11月22日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 60%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散 (ドリフト) しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類 (FRAC コード、IRAC コード) の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。